寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号（〒807-1261）
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

今年の演目は仕舞が《野宮（ののみや）》と《碇潜（いかりかづき）》、能は《花月（かげつ）》

三月恒例のこやのせ座・能の公演が今年は三月の二十日土曜日におこなわれます。

演目は仕舞が源氏物語による〔野宮（ののみや）〕と平家物語による〔碇潜（いかりかづき）〕の二演目で　能は謡曲の四番目物で京都清水寺での親子再会の物語「花月（かげつ）」主人公の花月を観世流シテ方：森本哲郎　父親の僧を宝生流ワキ方：江崎敬三が演じます。

地元の〔こやんせ座〕で日本古典芸能の粋ち云われちょる「能」の勧賞がでくるとですばい　そうよう誘い合うちから見えちゃんなっせえ　頼んじょきます　待っちょりますばい。

大好評の『こやのせ座親子お能教室』も同時開催

又「能」の普及に努められる森本哲郎氏のご協力を持ちましてこの度も恒例となりました〔こやのせ座親子お能教室〕（無料）も同日併せて開催致しますので宜しくお願い申し上げます。

尚　当日は「こやのせ座ボランティア」による飲食バザー（ウドン・カレーライス・コーヒー）の用意もございますのでご利用の程　宜しくお願い申し上げます。

こやのせ座運営部会長　紅屋泰助

▼お能教室には毎回多数の親子が参加

▲伝統芸能に触れられる貴重な体験

連歌師宗祇と扇天満宮の関連資料を一堂に集めました。初公開の扇天満宮縁起や扇天神碑文の草稿、岩尾四十三郎さん作の童歌扇天満宮などが好評でした。

会期中の来館者は1,168人でした。ご協力頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。

１１月６日～１２月１１日の毎週金曜日、全６回の講座を開催し、木屋瀬宿、中世の木屋瀬、五卿をテーマにした講義や、木屋瀬をはじめ八幡や佐賀の長崎街道見学を

魅力を再発見　講座 木屋瀬「時代の散歩道」終了しました

実施しました。

今年度は４７名の方が大変熱心に受講して下さり、木屋瀬の魅力を再発見して頂けたようです。

史料館企画展「（仮称）収蔵庫蔵出し展」のお知らせ

平成22年2月20日（土）～3月22日（月）

大正・昭和の古写真から、木屋瀬の歴史を紐解きます。どうぞお見逃しなく！

シリーズ　第18回　筑前木屋瀬宿　神仏めぐり　須賀神社（その二）

「歴史とは何か、それは過去との対話である」と言う言葉がありますが、須賀神社境内はまさに木屋瀬の過去と尽きることのない対話の場でもあります。

境内に入ると直ぐ右側に宗祇の碑「**ひろく見よ民の草葉の秋の花**」と書かれた句碑があります。裏には、「昭和五十七年四十四賀一同」と書かれています。この句碑の建立には、会の代表者であった岩尾太郎氏が強い思いを持って尽力されましたが、五十六歳の若さで亡くなられました。太郎さんと私は家も近く一つ違いの幼馴染でいろいろな思い出があります。

さて、宗祇は室町時代に絶大なる人気を博した京の連歌師で、木屋瀬の歴史を語る上で欠くことの出来ない人物です。宗祇は文明十二年（1480年）に、山口から大宰府参拝の旅をしますが、その旅日記を「筑紫道記」という紀行文を残しました。その中に、「九月十四日、こやのせに泊まる」として、句碑の句を残したのです。又「その夜天神と名乗る男が夢に現れ、扇を頂く夢を見、その後大宰府に参拝すると深野筑前守から扇を頂いた。まさに正夢であった」と書き残しています。その後木屋瀬の人々は久保崎天神を扇天神と呼ぶようになったと、江戸時代の学者、伊藤常足の書いた碑文が今も扇天満宮にあります。この日記から、五百三十年前より都の歌人を迎えて連歌の会が催されるような雅な世界が木屋瀬にあったことが分かります。

◀須賀神社境内にある宗祇の句碑

さて、須賀神社の宗祇の碑の書は、太郎氏の伯父である、岩尾清兵衛氏が揮毫されています。岩尾清兵衛さんは、今の、みちの史料館のある場所で酒の醸造業を営み、「若鶴」という銘酒を作られた方です。その清兵衛さんの句碑が、本田こうじ屋さんの前の鳥居の傍にあります。この句碑は福岡第一師範学校岩尾清兵衛先生門有志により建立されています。句は、「**ながれ来る唄はじろさよ盆のうた**」です。その隣には、清兵衛さんの弟であり、太郎さんの父上である岩尾四十三郎氏の句碑があります。北九州市誕生を祝しての句です。

「**梅が香や垣根はらひしひろき庭**」

裏には、辞世の歌でしょうか、

「**思案橋　こえてぞゆかん　さわやかに　父いますくに母いますくに**」

と詠われています。この句碑は、平成二十一年に「筑前木駅茶目気一輪講中」により建立されています。岩尾四十三郎氏は木屋瀬という小さな町からの市議会議員でしたが、北九州五市合併という大事業の中心的役割を果たされ成し遂げられた偉大な政治家であり、又、戦後失われつつあった木屋瀬の文化を数多く残してくれた郷土の大恩人でもあります。このような人物を育てた木屋瀬の文人の最高峰であり、四十三郎氏と懇意で、太郎さんと同窓の国学院大学の先輩であった、伊馬春部氏の生家の復元や継承に太郎さんが尽力された事も忘れられません。

さて、山笠会館前の鳥居は、醤油醸造業で明治、大正の時代に財を成された新地の感田屋の松本家、神殿近くの二の鳥居は、石炭業で財を成された小林家、境内の常夜燈は、「蝋梅」という酒を醸造されていた長野家の奉献です。それぞれが地域の神社仏閣に貢献され、木屋瀬の町の歴史が感じられます。神社は参拝する事で心が癒されますが、他にもいろいろと愉しみがあります。

まだまだ、語りつきませんが次回にさせていただきます。

なごごとの
おわしますとも　知らねども
かたじけなさに　涙ながるる
西　行

（本町　野口靖彦）

伝統行事　平成21年度　子供ゑびす頭　二日間、天候にも恵まれ元気に頑張りました

12月5日、6日と須賀神社にて5名の児童による子供ゑびす頭が行われました。元服の意味をもつこの祭りは、昔は数えの十一歳、現在では小学校4年生の男子を頭（かしら）と呼び、頭が主役となってゑびす祭りが執り行われます。5名の頭の名前が披露された紅白の幕を笹山笠に張り、二日間に渡って町内を曳き廻しました。師走ではありましたが天候にも恵まれ、5名全員が元気一杯山笠を曳き、社宝を持って御神幸行列で町内を廻りました。二日目は山笠を曳いた後、祝い膳（江戸時代には大名に振る舞われた物）につき、滞りなく二日間の行事を終えることができました。今回、子供たちがこの行事を経験したことで、木屋瀬の伝統文化に関心を持ちながら育っていくことと思います。最後になりますが、準備から山笠解体までご協力頂いた方皆様、ご芳志を頂きました皆様に、保護者を代表して心より御礼申し上げます。

代表世話人　梅本　歩

法被紛失！留置、連越！内済で決着！

木屋瀬宿人馬方徳平　同宿問屋左七
乍恐届申上ル候口上之覚　其の三

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

今を去る百五十四年前の安政三年辰八月十日、長崎に下向中の長崎奉行荒尾石見守の小姓に仕える小人（足軽程度の下級武士）某の法被が、所在不明になる事故での発生の顛末書である。

勿論、紛失したのが出立した際の木屋瀬宿内か、継立で飯塚宿へ向う道中なのか定かでない。「当宿御昼休被為遊飯塚宿江御継立仕候処御同勢之御家来之壱人法被致紛失……」以上が紛失発生の原文である。法被着用については、私共は祇園祭等のイベント等に着る程度の感覚だが、江戸時代の大名行列や長崎奉行一行が隊列を組んで、城下町や宿場を通行する際に身に着ける法被や頭に被る笠は、祇園祭の時と違って重みや格が格段の差があるようだ。

大名行列の絵図を見ると、全員が笠や法被や羽織を着用している。正に正装とも言えるようで、或る藩での笠の着用についての定法、「一御関所並び船渡場には、笠脱ぎ候事。」「二城下並び宿々御通りの時、笠・法被着用は申す間敷く、但し雨降り候時は格別の事。」上記の事は、関所は幕府の管轄下にあって関所の取締規定の方が優先するからである。二項については、城下町を通っている時は、威風堂々と奉行や藩の格式で行進しているので、被った笠を取ったり法被を着用しないのは、笠と同様法被の背中に主家の家紋が染め抜いた公式の衣裳であるから、礼儀上から失礼とされていたのであろう。

▲ 主家の紋を染抜いた半纏（この紋は牧野家）

さて、法被紛失の本筋に戻っていきたい。法被持主の武士が、「何処で紛失したのか！」「私共は一向に相知ません」との問答の繰り返し、到頭「殊の外御立腹被成人足共留置品物相知候迄ハ連越……」と申された。木屋瀬宿の人馬継立の才判の者（監督や指図をする）に、人足一同が法被紛失と立腹の話を伝えた。早速、飯塚宿本陣内に於いてお詫びを申し上げたが、『一圓（全く・すべて）御聞入無御座候』そこで、飯塚宿に他の件で出張中の宿役人に取り成しを依頼をした。木屋瀬宿役人はこの一件を飯塚宿の宿役人に話して、一緒に法被持主の武士に低身低頭で詫びた結果、『引取候而（委細承知した）穿鑿（取調べる）仕司申段（行う）相宜左之様被仰付（事情聴取を命じられた）難有奉畏（有り難くて恐れ入ります）……』という事になった。

早速、人足達を連れて来るように申されたが、彼等人足達は非常に恐れをなして何度も、留置・連越を（帰さないで引き連れて行く）嘆いている有様であった。この様相を目撃し事情を聴取した結果、両宿場の宿役人は郡家（宿役人や庄屋達の協議場所）で話し合い、法被紛失の究明は内分にして、代りに弁償額として金百疋を差出す。その代りに人足達の留置・連越を行わないで、宿役人が引取るというのが内済で決着した。

弁償額の金百疋とは、疋は銭を数える語で鳥目（銭の穴が鳥の目に似ているから）十文で、百疋は千文（一貫文）で、一両の四分の一（金一分）である。内済は、内々で処理することなので、当事者間で話し合って和解していく事であって、人足側の宿役人と法被の持主との間で決着がついたわけである。

法被の紛失で立腹し、人足達を次の内野宿迄相連れて留置（拘束して帰さない）されないので、内済で一件落着となった。こうした結末のつけ方が、数々の覚書を読んで多いのに驚いた次第である。

【熱き思い】を体現する雨中の舞

今回は天候不順のため　生憎人出は例年程ではございませんでしたが〔こやのせ座〕の活用により予定プログラムを恙無く執り行う事が叶いました事をご報告申し上げます。

此れも偏に〔筑前木屋瀬宿場まつり〕の開催趣旨にご賛同戴き多くのご寄付を賜りました地域の方々や　急遽の会場変更にも拘わらず臨機応変に対応戴きましたスタッフの皆様のご理解・ご協力の賜物と感謝し厚くお礼を申し上げます。

思い起こせば第１０回の事　開会式後　突如の降雨に見舞われましたが〔筑前伝承盆踊り〕の〔こやのせ座〕を使用しての決行に何故か理解を得られず　現場関係者の熱き思いからそれならばと〔筑前伝承盆踊り〕の下町会場に急遽テントを二棟張り決行　其の二棟のテントを張ったままの状態で街道筋を感田町会場まで雨の中をワッショイワッショイと山笠の如く人力移動して全プログラムを完遂した思い出も今では笑い話でございます。

因みに〔筑前伝承盆踊り〕参加団体でも　此の時の〔雨の中の盆踊り〕は木屋瀬者の“熱き思い”の証として語り草になっているようでございます。

最後に、これからも木屋瀬住民の郷土の誇りとなる行事へと成長する事を願い〔本物志向の継続〕と〔自主企画・自主運営〕の信条と“熱き思い”で取り組んで参る所存でございますれば　地域の皆様方にはご協力並びにご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

▼雨の中でも会場は熱気が溢れる

（こやのせ座運営部会長　紅屋泰助）

今年も大盛況！

第9回木屋瀬いろは歌留多大会

新年の恒例行事〔木屋瀬いろは歌留多大会〕ですが　今年は総勢二百名を優に超える参加者の熱気で〔こやのせ座〕は充ち溢れ〔こやのせ座ボランティア〕の用意したゼンザイ二百人分とウドン三百人分も品切れ御免の大盛況でございました。

因みに入賞者は（敬称略）〔小学生の部〕優勝：上野　りょう（木小）・準優勝：梅本涼（木小）・第三位：伊藤綾穂（星小）・篠原　祥（星小）〔一般の部〕篠原　実（木中）・準優勝：松本萌花（木中）・第三位：川崎遥花（木中）・倉田明歩（木中）と云う結果でした。

さて本大会の益々の隆盛と発展性の大なるを作者である「故・岩井屋不彫さん」に心より敬意と謝意を表し　第六回の報告で〔木屋瀬いろは歌留多〕が作られた経緯・事由ならびに本大会の開催趣旨をご説明させて戴き　一昨年の第七回では「不彫さん」の功績と足跡を簡略に紹介させて戴き　昨年の第八回からは「岩井屋不彫さんの木屋瀬いろは歌留多」を㋑から順に私の拙き識にて作成しました説明文を添えて紹介させて戴いて居ります。

今回は㋺『蝋絞　板場が　三四軒』をご紹介します。

㋺

蝋絞
板場が
三四軒

【説明】宿駅往時　黒田藩（筑前）では黄櫨蝋の生産が重要産業として奨励されていました。

板場とは、黄櫨の実を蒸し絞り生蝋を製造する処のことを総じて呼称する言葉でございまして　往時は木屋瀬にも近郷近在より集荷した黄櫨の実から生蝋を製造する板場が三～四軒在り　蝋燭も製造していたようでございます。

現在の旧高崎家住宅・伊馬春部生家〔屋号柏屋新・カネタマ〕前の高崎家の本家〔屋号：柏屋・カネシメ〕が木屋瀬を代表する蝋絞板場であったと古老より伝え聞いて居ります。

それでは「不彫さん」の遺功と　こよなく郷土木屋瀬を愛された人柄を偲びつつ〔第九回木屋瀬いろは歌留多大会〕報告を〆させて戴きます。

こやのせ座運営部会長　紅屋泰助

わたしの昔話

御伊勢参りと木屋瀬

【柴田豊廣遺稿集】より

平安時代の貴族達は、弥陀の世界の極楽浄土を自分の未来もこんな極楽浄土でありたいと一心に願った。そして金に糸目をつけずに自分が求める未来の浄土をこの世に実現した。平等院、三千院、苔寺等がその代表的なものである。又、一般には未来だけではなくて、現世においてもご利益を受けられる多くの信仰があり、人々の心の拠所となっていた。又道路や宿場が出来、庶民の旅行が容易になり平安文化が集結する上方に大きな憧れを持つように変わってきた。見る物聞く物、総てが珍しい旅の中で神仏を巡拝し、神仏を御前に自らを侍らす事のありがたさと、礼拝の中で心が洗われ、我欲をなくす醍醐味の信仰三昧境にも大きな夢を持つようになった。厳島や金毘羅や熊野や、奈良京都の寺々や上方見物も取り入れた。御伊勢参りが大流行となったのも、その現れであろう。

原田山家に冷水峠、エッホ山駕籠、内野宿飯塚、木屋瀬碁盤の表、駒を早めて黒崎へと筑前六宿を詠んだ長持歌が街道に流れ、木屋瀬宿に春が来ると、西九州や南九州から御伊勢参りの人達が、団体の目印に杖に赤布を巻いたり、笠に小短冊を下げたりして行き交うので、木屋瀬宿は常に晴れ晴れした旅姿の花道であった。木屋瀬の特産ビータラ飴と季節物のマクワ瓜とが、土産物の中でも有名であり二十店位あった。旅具の店や赤毛氈のお茶屋等が美しく連なり、家紋や家号を入れた暖簾もなびき、御伊勢参りの人々を暖かく迎えていた。

御伊勢参りは、四ヶ月から六ヶ月の日数を必要とし、近親者と水盃を交わして出発する慣わしが木屋瀬にもあった程の旅だが、益々盛んになるばかりなので各藩も慎重に考えた。先ず藩内の金が他藩に流出する、次に折角の美田や畑が荒れる等々が心配となり、各藩旅行規則を設けた。

- 期間は百日以内の事、時期は農閑期の事。
- 一町内の同時旅立ちは十二人以下の事。
- 旅行終了報告は必ず提出する事。

こうした規則の誓約書を出させ、通用期間百日の通行手形を渡す事となった。その為「おかげ参り」、「ぬけ参り」する人もかなり出た。

木屋瀬の御伊勢参り姿は、宿場踊りの姿に現されているが、朝夕見ている他町村の御伊勢参り姿を参考にして作り出されたトップモードであった。腰に下げた提灯は御伊勢参り木屋瀬団の目印の役目も兼ねていた。お見送りは香月町の石坂まで、町内の人々や交友大勢に送られ、この地で牡丹徳利の栄重とで酒宴を開き、祝福を受けながら石坂を登り、手を振り交わし別れていた。

伊勢へ発つ　母の若さや　風かほる

御伊勢参りは百日以上も歩かねばならず、家の中でも働き盛りの元気な大事な人が参拝するので、留守見舞いの慣わしがあった。留守見舞いは必ず栄重にて食物を頂く、これを隣近所に御配りする、こうした心の交流が留守の間適当に続けられる。帰りも飛脚の前触れにより石坂まで迎えられていた。留守の間の御礼を兼ねた宴会は実に盛んであった。尚、御土産や荷物は船で若松へ、若松より川船で木屋瀬へ。